

ネットワークイデオロギー

-Network ideology-

2世紀の最初の10年は、ネットワーク環境の基盤整備にして、現代社会が大きく展開する時代である。
本論ではネットワークがもたらす社会生活面での影響について考える。

1. 恋愛至上主義と核家族

20世紀前半の世界に典型的な国威発揚の映画を観ると、多くのモダンの人々は、そのイデオロギー性に呆れ、「なんで国家のために、自分のすべてをささげるのだらう」と疑問に思う。しかし我が身を振り返ると、みんなが素直に映画『タイタニック』に酔っている。今の社会では、国威発揚の代わりに「恋愛至上主義」のイデオロギーが蔓延している。これは20世紀後半の高度消費社会が産んだ歴史的幻影である。

このイデオロギーがもっとも鮮明にしかも直接的に反映されるのが家族関係である。そこで簡単にまとめると、家族形成の原理は、その歴史的展開において、まずは親子関係（血縁）を核にして形成されてきた。父系か母系かの差異はあっても、血縁によって家族は維持されていた。それが近代以前のことであり、その家族形態の拡張として国威発揚のイデオロギーが形成されていた。それが近代社会になると、親子関係に代わって、男女関係が優位になった。そのシンボルが恋愛関係である。血のつながりから、愛のつながりが優先される家族へと、家族（そして社会）形成の基本原則が変化した。だから近代社会における核家族は、まずは男女の恋愛から形成されなければならない。愛の絆は血の絆を超えるものになった。今のハリウッド映画で執拗なまでに恋愛の価値が高揚されているのは、このような社会的な背景と無関係ではない。わたしたちは無意識に恋愛至上主義のイデオロギーに浸り、これこそが人間らしいあり方だ、と信じている。つまり核家族では、愛がすべての本質である。それを無視して核家族は成立しない。ほんの少し前までは、誰もが血縁によるイエの継承こそが家族（伝統的家族）のあるべき姿だ、と信じていたのに、今では、誰もが「愛がすべてだ」と信じきっている。

問題はここからである。恋愛は近代社会の根幹を支える『所有』の概念を素直に継承しているので、つぎのような2つの排他性のルールに従っている。1つは、「もしも、ある人が、他のある人（もの / こと）を自分のものだ、と主張すれば、他のいかなる人は、ある人（もの / こと）を自分のものだとは主張できない」というルールである。もう1つは、「もしも、ある人が、他のある人（もの / こと）を自分のものだ、と主張すれば、その人は、他のある人（もの / こと）以外のいかなる人（もの / こと）をも自分のものだ、とは主張できない」というルールである。これが私的所有のルールであり、これに恋愛も準拠している以上、男女がともに、相互に排他性のルールに従うとすると、相互に一人の相手しか愛さず、ここに愛の独占が二人の愛を正当化する、という論理が成立する。恋愛・結婚そして愛の結晶としての子供の誕生という一連の核家族の生成・維持のプロセスは、愛の排他性をもとに構築された近代社会そのものの縮図である。もっとも、現実的には、ジェンダー論者が批判したように、この原理を遵守させられたのが女性だけで、男性は排他性の原則をかなり逸脱していた、という事実は自明であり、それが、ジェンダーの非対称性として、核家族批判の論拠とされたことも事実である。ただ基本的なコンセプトとして、愛の相互的な排他性のルールによってしか核家族の成立はありえないのである。

さてここで問題にすべきことは、恋愛が排他性という所有概念そのものから構成されていることである。なぜそれが問題なのかといえば、ネットワークの関係には、排他性を重視する私的所有は基本的には馴染まない。つまりネットワーク環境と核家族は真正面から矛盾する関係にある。したがってネットワーク環境を優先するとしたら、核家族を支えた恋愛価値に代わる、第3の関係生成の原理が不可欠である。とするとすでに親子関係（血縁）と男女関係（恋愛）は却下されるので、残りは、ただひとつ「きょうだい関係」しかない。これは、親子関係のような上下・権力関係でもなく、男女関係のような排他的・独占的な恋愛関係でもなく、弱い者同士のしかもジェンダーを超えた、相互依存・支援的な友情（パートナーシップ）を原則とする絆である。ここに新しい家族を形成する契機を期待することは可能なのだろうか。

2. 第3の絆

きょうだい関係は広がりをもつ。「きょうだいは、他人の始まり」という諺があるように、きょうだい関係は、親にも配偶者にも拘束されないから、つねに外部へのつながりをもって家族を維持できる。核家族では、恋愛の絆が男女関係に閉じているので、家族の境界を越えて、家族としての広がりはない。どこまでも閉じることで、核家族は機能する。これにたいして、親子関係からなる伝統的家族では、血縁がその縦のつながりとして、家族を拡張する機能を果たすので、ここに親族が形成される。その親族の最大の拡張として、伝統的な国家が成立するのである。

きょうだい関係は、血縁の縦系列の拡張とは対照的に、横のつながりの拡張をもたらす。家族を超えた拡張性をもつという点では、恋愛の絆とは違って血縁に似ているが、その拡張性の方向にかんして、血縁とは明らかに異なっている。ではそれはどのような特性をもつか。

まず、きょうだい関係はよわい者（フラジャイル）同士のつながりである。したがってこの関係を維持するには、権力（血縁における親）と恋愛の場合ように、所有による関係づけではなく、非所有（何もない、だから助けて）をもとに生成される「探索と支援」の関係に頼らざるをえない。しかもその探索と支援は、狭い家族の領域ではまったく充足されないから、つねに外部へと関係づけが拡張される。自分の家族は、その意味では、非常に弱い拘束しかもたず、その境界は柔らかくならざるをえない。自分の家族は、したがって閉じることなく、外部への依存（探索と支援）を前提として構成される。

つぎに、きょうだいは性別を問わないから、家族は、男女のカップルを前提とすることはない。ゲイ / レズビアン の家族も、ここでは成立可能である。また通常の弱者である子供や高齢者は、その扶養を外部に委託される存在である。そもそも家族の主たる構成者さえも弱い存在（概念としてであるが）であるから、ここでは、家族全員がみんな弱い者でしかない。とすれば、子供や高齢者を、自分の家族の内部に抱えて面倒をみなければならない、という資格も規範もここにはない。素直に外部との関係で扶養することが望ましい、という論理が導かれる。

最後に、きょうだいの絆である「友情（きょうだい愛）」とは何か。恋愛の愛が相手を奪うことであるのに対して、友情の愛は、相手を支えることである。自分が強いから奪うのと対照的に、ここでは、自分は弱いから相手を支える（尽くす）のである。これはボランティアの精神そのものである。友情（友愛 / フレンドシップ / パートナークシップ）は、その意味ではボランティアとしての振る舞いである。つまり友情はネットワークにおける精神そのものである。ネットワーク環境になかで家族を構成しようとすれば、二人は、それが男女関係であっても、恋愛である以上に友愛（ボランティアの精神）の絆を優先して、自分の家族を生成しようとする。

このようにみると、ネットワーク環境と家族との関係では、きょうだいの絆がよりふさわしいかもしれない。そこでつぎにネットワークそのものに言及してみよう。

ネットワークイデオロギー

-Network ideology-

2世紀の最初の10年は、ネットワーク環境の基盤整備にして、現代社会が大きく展開する時代である。
本論ではネットワークがもたらす社会生活面での影響について考える。

3. 脱境界の思考：覗きと露出

のぞき趣味は悪いと、誰もが思っている。同じように露出狂も一種の狂気だろうから、誰もが悪いことだと確信している。なぜ誰にも見せたくないことを、のぞき見したくなるのだろうか。なぜ誰もみたくないことを、見せたいくなるのだろうか。この2つの行為には越えてはいけない境界を越えるという共通点があり、その越境がいまの社会的なルールでは悪いというレッテルを貼られる行為なのである。ここには、プライベートな世界という明確な境界があり、それを外から了解なく侵害することは許されないし、また外のパブリックな世界が求める「あるべき姿」に違反して、寝間着姿で公式パーティに出席するように、本来プライベートな世界に封じ込めておくべきことがらを、節操なく外に露出することははしたない、というルールがある。これが公私（内外）のルールである。

しかしネットワークの環境では、このルールはもはや無効である。最近流行のCCDカメラをネットワークにつなげて楽しんでいる場面を考えてみよう。自分の私的な部屋にCCDカメラをセットすると、通常ならばドアを閉じれば、そこは完全に私的な空間になるけれど、ここでは外部から部屋の様子を覗くことができる。インターネットのホームページにこうやってカメラをつなげているサイトはたくさんあって、それなりに新しいのぞきの環境が提供されている。これは、あきらかに自分の部屋と外部との境界を曖昧にすることで、新しい世界を生成している。この環境では、昔ならばプライベートな自分の世界に封じ込めるべきことを、そのまま外部に公開して、そのことで、新しい自分のあり方を表示している。自分という個人を、プライベートとパブリックに明確に区分することで、自己の存在を証明する（つまりアイデンティティを確認する）のではなく、積極的に境界を曖昧にすることで、新しい自己のありかたを追求している。自分の毎日の日記をネットワーク上で公開する、ということも同じような試みである。ここには私的な世界を外部に露出することで、また外部も積極的に私的な世界に踏み込むことで、自他の社会関係を根本から変革する。のぞきも露出も、ネットワークの環境ではそれなりに許容された新しい関係である。

ネットワーク環境では、境界の概念が欠落している。従来のように、まずは境界を設定して内と外を確定し、その前提にもとづいて内部調整（分化と統合）と外部調整（交換と権力）をはかる、という方法論がネットワークでは欠落している。ネットワークには、まずは境界ありきの発想はない。あるのは「まずはリンク」である。まずはどこでもいから「つながる」ことが最優先される。そこでは内も外もないから、従来のような内/外を前提としたルール化がなされず、したがって「覗きや露出」に相当する行為が許容される。これは主体/システムの境界設定を前提にする既存の考えを根本から変革する重要な思考方法である。

ネットワークイデオロギー

-Network ideology-

2世紀の最初の10年は、ネットワーク環境の基盤整備にして、現代社会が大きく展開する時代である。
本論ではネットワークがもたらす社会生活面での影響について考える。

4. 豊かさの思考：情報共有

希少性の原則にこだわるかぎり、ネットワークは理解できない。ネットワークには、『よいものはたくさんある』というアバンダンス（豊かさ）の認識が必要である。その認識が理解されるとき、そのよいものを媒介にして、すべての人々が相互に共有したり公開して、よいものを「よりよいもの」にしようとする関係がネットワークのなかで生成される。こうして、よいものは公開されてさらに多くの人々に共有され、そしてさらによりよいものへと変換されていく。

情報の公開と共有が、よいものをさらに多くの人にもたらし、しかもよりよいものを創造する、という関係が生成される。これがネットワークにおけるアバンダンスの原則である。情報の秘匿と所有は、「もの」の希少性を前提とする貧しい世界では基本原則にならざるをえなかったが、ネットワークの世界では、そのような原則は放棄される。ネットワークの世界では、希少性は無意味である。

そもそも情報はその本質において所有する価値がない。「もの」が、その所有する主体から離れた瞬間、その主体のもとには存在しえない特性をもつのにたいして、情報にはそのような性質はない。「もの」は、他人にあげれば、すでに自分のものではないが、情報は、いくらしゃべっても、自分の頭から消えることはない。「もの」が基本的に所有されることに価値をもつのにたいして、情報はすべての人に共有されることに価値をもつ。「もの」は、それを所有する人によって、その価値が強く規定されるけれど、それとは対照的に、情報は、それを共有する関係によって、その価値が規定される。しかも共有する規模が大きくなり、情報公開が徹底されるほど、またそれによって、情報それ自体の再創造が生成される過程によって、情報の価値はますます増大する。このように、情報は、その本来的な特性において、希少性・秘匿・所有を排除し、創造性・公開・共有を自明とする。これがアバンダンス（豊かさ）の原則を支えるのである。

ネットワークイデオロギー

-Network ideology-

2世紀の最初の10年は、ネットワーク環境の基盤整備にして、現代社会が大きく展開する時代である。
本論ではネットワークがもたらす社会生活面での影響について考える。

5. ボランティアの思考：情報探索と情報支援

従来の情報 / コミュニケーション論の基本は情報発信 / 情報所有の考え方にある。つまり情報発信するには情報を所有していなければならない、しかも情報発信に価値を発生させるにはその情報が希少でなければならない、その希少な情報を所有することではじめて情報発信が社会的意味をもつ、という論理である。しかしネットワーク環境では、人々は情報発信を最優先しない。まずここで重要なことは「人は情報を所有していなくても主体的にネットワーク環境に参加できる」という認識である。欲しい情報が手元には何もないという条件がネットワークでのコミュニケーションを始動させる第1歩である。人は情報を所有していないから、ネットワーク環境で情報を求めて探索する。だからサーチエンジンがネットワークでは不可欠なツールなのである。つぎに「自分のほしい情報はネットワークで誰かが保有している」という認識も重要である。しかもその誰かは、情報を保有しているけれど、発信しないでじっと待っているだけである。そしてそこにサーチエンジンを介してアクセスしたとき、自分のほしい情報が得られるという仕組みがネットワーク環境である。

誰もが情報を所有していないから、情報の希少性は問題にならない。情報を保有しているのはアクセス先で、しかもその先方はネットワーク上に無限に散在してじっと待つだけだから、情報を所有する意志はそこにはない。だからすべての先方はネットワーク上に情報を公開しているだけである。とすると、ここから情報は探索行為を支援するために存在する、という関係が発生する。それが情報を共有することで成立するネットワークの精神である。ネットワークにおける関係の基本は、したがって、情報所有と情報発信ではなく、情報非所有と情報探索であり、その行動を支持する情報支援と情報共有の関係である。これは既存のコミュニケーション行動を根本から変革する。

ネットワーク環境では、人はすべて「知りたい、でも知らない、だから、誰か助けて」という意味で弱い人であり、その前提に立脚してコミュニケーションが発動される。だから情報探索がスタートで、情報支援がそれに応えることで、コミュニケーションが成立する。したがって既存の情報発信と情報受容のコミュニケーション図式はもう古い。これは、情報を所有している人と所有していない人の落差を利用して、情報が伝達される図式で、これは対面的で閉鎖した関係に典型的なコミュニケーション・パターンで、ネットワークという非対面的でオープンな環境ではふさわしくない。情報発信－受信のモデルが、強者と弱者の関係から構成されるのにたいして、ネットワーク環境では『すべてが弱者で、同時にすべてがボランティア』なのである。ネットワークは、相互に情報探索し相互に情報支援する関係をもっとも優先する環境である。これはボランティアそのものである。すべての人が、弱い自分を前提にしてコミュニケーションをするとき、そこではすべての人は必然的にボランティアとして行動せざるをえない。一部の弱者にたいして一部の強者がやさしさを振りまく、という役割分化が確定した関係としてのボランティアではなく、すべての人が弱いことで、その人の心理（やさしいとかのボランティア精神）に関係なく、誰もが社会的な役割関係においてボランティアとして行動する。ネットワークの基本はボランティアのネットワークなのである。

ネットワークイデオロギー

-Network ideology-

2世紀の最初の10年は、ネットワーク環境の基盤整備にして、現代社会が大きく展開する時代である。
本論ではネットワークがもたらす社会生活面での影響について考える。

6. 小さな公共性の思考：自己責任と相互了解

ネットワークでは無数の知らない人とのコミュニケーションが基本である。この場合知らない人とのコミュニケーションを支える信頼（社会的正当性 / 公正）の根拠はどこにあるのだろうか。そこで信頼の根拠を既存のコミュニケーションとの比較で考える。

まずみんなが知り合い同士の昔のコミュニティ、原理的にはパーソナルコミュニケーションの世界では、身体的な接触を伴った知り合いという日常的な事実（「いま」と「ここ」の共有）が相互の信頼を成立させる根拠になっている。だから、知り合いの関係なのに、もしも信頼を損なうような事件（相手の予期を裏切る行為）を起こせば、その人は知り合いの関係から排除され、法外者としてコミュニティから排除される。だから信頼は知り合いという日常性にすでにセットさせている。だから知らない人は信頼されず、未知なる人とのコミュニケーションはここでは成立しない。

つぎにマスコミュニケーションの時代になって、はじめて一方的にしか知らない関係が生まれ、スターと大衆の関係のように、知られている人（だがこのスターは相手を知らない）と知られていない人（大衆というスターを知っている人）という関係が発生した。ここでは知られているスターは大衆を知らない人で、知っている大衆は知られていない人という歪んだ関係になっている。このような一方的な認知と場の非共有（テレビなどのマスメディアでしか会えない）という状況のなかで、相互の信頼はいかにして生成されるのか。ここではスター（それを支える大組織）という情報発信サイドが所有する「権威」が大衆からの盲目的な依存（価値委託）を誘発するのである。この階層的な関係そのものに潜む権威が放つオーラに、大衆は価値（貨幣・権力・威信・尊敬）を無条件で譲渡する。こうしてマスコミュニケーションのなかでは権威による信頼関係が形成される。マスメディアは権威そのものである。

さらにサブカルチャーの時代になると、どうなるのか。いわゆる「おたく」のコミュニケーションを支える信頼の根拠が問題になる。ここでは似たもの同士の共感という関係が信頼をもたらす。サブカルチャーという特殊なコミュニティメディアを通して知り合うことで、外部に対して閉じたところから発生する自分たち固有のジャーゴンを用いることで、自分たちだけにしか理解しえない密室的な共感をもとに、信頼が生成される。おたくはこの独自の共感をもとに信頼関係を築き、だからこそその領域に閉じこもることで、自由なコミュニケーションを相互発信させるのである。

このように信頼をもたらすキーコンセプトは、日常性（身体的な接触）・権威（大きいこと）・共感であるが、ネットワークの世界では、なにが信頼を呼ぶのであろうか。ここではお互い知らない同士である。知らない者同士がいかにして信頼関係を築くことができるのであろうか。結論は「できない、だから自己責任」である。つまり知らない同士であるから、知り合いの裏返しで、裏切られることを自明として関係を形成するしかなく、また同時に探索・支援の関係が優先されるとしても、未知の人からの支援は、相手の優しさではなく単純にシステム（支援はエージェントの探索の結果にすぎない）に依存するものであるから、支援情報の評価はすべて自分の自己責任においてなされなければならない。つまり自己責任がルールとして確立されていないと、裏切られたなどの無用な騒ぎになるので、そういった無用な情報が支援として飛び込んでくるという認識のもとで、その混交玉石の情報の束のなかから自分に必要な情報を選択することが自己責任において実行されないかぎり、ネットワークはうまく作動しない。とすれば、自己責任のルールによってのみしか、知らないもの同士の信頼関係は生成されえない。かくしてネットワークは信頼関係の根拠を自己責任に求める。ネットワークがボランティアの精神を求めるのと同時に、そこでは自己責任のルールも十分に了解されなければならない。ここは甘い世界ではない。

しかし自己責任はある意味では究極の「オタク」である。信頼の根拠が自分だけだとしたら、そこには社会に支えられる正当な根拠はない。社会的な正当性は自己責任を超越する論理を必要とする。それが「相互了解プロセス」である。自己責任に基づく社会認知には、相互性の契機が欠落しているから、そこを埋めなければならない。そうしないかぎり、正当化された社会関係は生成されない。そこで期待されるのが相互了解のコミュニケーションプロセスである。個々の自己責任による異なった社会認知は、相互コミュニケーションによって、各主体には自己超越（自己変革）をもらたし、社会関係としてはなんらかの相互理解に到達するというプロセスをもたらす。そこで合意 / 了解されたとき、自己責任は社会関係のなかで正当化される。しかもこの了解は、あくまでも小さな（限定空間における）公共性にすぎず、相互了解の外部にある大きな（客観的 / つまり空間超越的）公共性ではない。ネットワーク環境では、このような大きな公共性はもはや期待できないので、無数の小さな公共性のさらなる相互了解プロセスが、大きな公共性に代替するものとして必要とされる。こうしてネットワーク社会の社会的な正当性（公正の根拠）は、自己責任と相互了解プロセスの融合と拡散のなかに見いだされる。

ネットワークイデオロギー

-Network ideology-

2世紀の最初の10年は、ネットワーク環境の基盤整備にして、現代社会が大きく展開する時代である。
本論ではネットワークがもたらす社会生活面での影響について考える。

7. ネットワークイデオロギー

上記のようなネットワークの思考は20世紀システムの論理とはかなり異質である。同様に20世紀の生活システムの恋愛至上主義と核家族にたいしても、ネットワークの思考は強い違和感をもつ。親子関係にみる階層的な関係（血縁）も、男女（夫婦）関係にみる機能関係（恋愛）も、ネットワーク環境を支える関係としては適合性に乏しい。論理的な整合性だけで評価するかぎり、第3の絆のきょうだい関係が示す友愛/ボランティアの精神だけがネットワーク的である。2世紀のネットワーク社会では、この第3の絆を相対的に優先する形で、新しい家族が構成されよう。

ただこのような生活システムが実現するには、まだ時間がかかる。ここ10年間はネットワークの情報技術に触発されたイデオロギーが浸透するプロセスにあるだけで、実際の社会変革をもたらすには、21世紀いっばいかかる。この意味では、ネットワークの社会的影響の問題はまさに2世紀的である。1革命は今やっとイデオロギーとして認知されただけである。